

社会の中の 東京大学

特集

とりたてて言うまでもなく、大学はすぐれて社会的な存在です。「象牙の塔」と揶揄された昔とは異なり、今日の大学は、積極的に社会と関わりを持ち、誰にでも開かれたキャンパスを実現するために大いに努力しています。社会が大学を必要としてその教育研究を支え、大学が社会を必要としてその発展に寄与する、こんな双方向のよい関係が築けるように、東京大学もまた全力を尽くしています。今回の特集では、限られたスペースではありますが、そんな努力の一端をご紹介します。また、特別企画として、一旦社会に出た卒業生に、外から見た東京大学について語ってもらいました。あらためて社会と大学の関係を考えるきっかけになれば、と思います。



現在の柏キャンパス(手前の建物が共同利用宿舎、右側の6階建て建物が宇宙線研究所、左側の建物が物性研究所)

地域に開く

柏キャンパスと柏市の相互協力関係

本郷、駒場、柏からなる東京大学の三極構造のもと、柏キャンパスが、地域に開かれたキャンパスをめざしてJ・R柏駅から直線距離で北西約五キロメートルの場所に新設されました。平成一二年四月には、まず、物性研究所と宇宙線研究所がこの新キャンパスに移転を完了し、研究教育活動を開始しました。地域に開かれたキャンパスをつくるために、大学は地域とどのような相互協力関係を作ってゆくべきなのでしょう。ある地域に住み、働く人々にとってそこに大学があることのメリットは、大学が発信する知的情報を

身近に感じる点でしょう。その意味で、大学の持つ知的財産を地域に還元していくことが最も大切ではないかと感じます。柏キャンパスとしての活動は始まったばかりですが、柏キャンパスと地域との協力関係を示すいくつかの活動を紹介しましょう。

地域との良好な相互協力関係を作るには、まず大学における研究活動を地域の方々を知っていただくことが不可欠です。このため、一月一・二日の両日、物性研究所と宇宙線研究所が一般に公開され、約二〇〇〇人の方々が施設を訪問されました。多くの方々

二つの研究所における研究内容に興味を持って下さり、非常にうれしく思いました。また、千葉県教育委員会主催のもと、千葉県内で科学に強い興味を持っている高校生を対象に、最新の科学の紹介を行う講座が夏休みの期間に開催されました。この時には、特に柏キャンパスの外にある宇宙線研究所の施設まで、高校生に一泊がかりで来てもらいました。

専門家が柏キャンパスを拠点として研究を開始します。そのなかには、柏市及び近隣地域、あるいは地域の産業の抱えるさまざまな課題の解決のために、必要な専門知識を持った研究者もきつといるはずで、そんな研究者を通じた地域との直接的な協力を含め、柏キャンパスと柏市及び近隣地域との相互協力関係はこれからより一層緊密になっていくでしょう。

梶田隆章(かした・たかあき) 宇宙線研究所教授

今後は、大学の方からもっと積極的にキャンパスの外に出かけて行って、研究内容を地域の方々と社会に還元していくことが重要になってくるものと思います。実はそのような試みも既に始まっています。平成一二年三月に柏市の多大な協力を得て、宇宙線研究所の研究分野の一つ、ニュートリノと呼ばれる謎の素粒子に関する一般講演会をJ・R柏駅のすぐ近くで開催したのです。この時にも、私たちの研究を理解するために多くの方々に参加して下さいました。



柏市中央公民館で行われた一般講演会

AGS総会へ市民派遣

柏キャンパスと地域との連携方策の一環として、本学とマサチューセッツ工科大学及びスイス連邦工科大学との三者で進めているAGS計画(人間地球圏の存続を求める学術研究教育活動)の年次総会(1月14日~17日、スイス連邦工科大学ローザンヌ校で開催)へ、公募による応募者87名から選考された千葉県在住市民5名を派遣しました。市民の皆さんは、気候変動、都市の管理等の地球環境をテーマにした研究発表会や、ポスターセッション等に熱心に参加するとともに、研究者・学生との交流も行いました。



運営総長、小林副学長を囲む市民の皆さん(レセプション会場にて)



夏休みに行われた、高校生を対象にした基礎科学講座(物性研究所内での講義)



柏キャンパスの一般公開

世界に開く

留学生センターの役割



留学生交流プラザで談笑する世界各国からの留学生の皆さん

東京大学は世界に開かれた大学として、現在世界の八〇の国と地域から訪れた、二〇〇〇名以上の留学生の方々日々学んでいます。留学生を通じて国際交流は、教育・研究の国際化・活性化を促し、国際理解と国際協力の精神の醸成をもたらします。途上国からの留学生の場合には、その人材養成に協力する意味もあります。留学生センターの主目的は、留学生のための日本語・日本事情に関する教育、留学生の修学上及び生活上の指導・助言を行うこととされています。これらを受けて、私たちは種々の工夫と努力を重ねています。

私たちの大切な使命は、留学生の日本語力向上に役立つことです。そのため、日本語教育部門に、留学生のレベルとニーズに合わせて、初級から最上級まで、少人数や多人数クラスなど種々のレベルのクラスを開設し、日本語の上達のお手伝いをしています。本来は大使館推薦の国費留学生のために設置されたのですが、余力のある限り私費留学生、その家族、研究員の方たちにも門戸を開いています。現在、センターでは約三〇〇人の方々が学んでいます。教室のスペースや教官数の制約があり、希望者全員を受け入れ



本郷小学校の生徒さんたちとの交流



和気あいの日本語教室風景

ることができないのが残念です。

相談・指導部門においては、留学生の教育・研究上の相談をはじめ、家族問題や学外でのトラブル、一般社会における生活全般の悩み事などの相談、指導・助言、カウンセリングによる心のケアなどを行っています。地域との交流にも積極的に取り組む、近隣小・中学校の総合学習授業の一環として行われる国際理解教育に協力するため、本学の留学生が講師として招かれたり、また、留学生の交流支援を目的とするボランティア養成講座と協力して、手作りの料理を楽しむ等、相互の異文化理解に成果をあげています。

留学生センターには、留学生交流プラザという談話スペースがあり、英語・中国語・韓国語・日本語の新聞、海外の雑誌などが多数置いてあります。また、隣接の部屋には一〇台のパソコン端末が設置されており、留学生はインターネット等を自由に利用できます。

留学生の苦労はさまざまにありますが、職員等の寄付によって運営されている、東京大学外国人留学生後援会は、奨学金事業、事故・病気等により入院した場合の見舞金、留学生の債務保証人として債務保証を行った教職員等への支援金の支給、民間アパート等に入居する際の機関保証等々を行い、留学生の駆けこみ寺的な働きをしています。

昨年、すべての留学生を対象に生活実態調査を行いました。現在、その内容を専門委員会で行い、検討しており、留学生の教育・研究にとって最適な環境を作るために、早急に実施・改善すべき点と、中・長期的に行うべき点を取りまとめているところです。まだまだ不十分ですが、全学のご協力のもとに、留学生の方々充実した日々を送れるよう、一層の充実をはかっていきたいと願っています。

小島孝之(こじま たかゆき 留学生センター長)

次世代に開く

高校生などのためのオープンキャンパス

毎年入学してくる将来性豊かな新生生のおかげで、大学の血は常に若くフレッシュに保たれます。その意味で、新入生は大学がもっとも必要とする重要な構成員です。しかし、大学で実際にどのような教育研究が行われているのかは、大学進学を考える高校生などには意外と知られておらず、偏差値のみが進学先決定の基準になっていることが少なくありません。東京大学は三つの極を持つ総合大学で、高校生などにその全貌を知ってもらうことはなかなか難しいのですが、将来の構成員候補者たちがその一部なりにとも接し、自らの進路を主体的に考える機会を提供することは大いに意味のあることと言えます。

「東京大学オープンキャンパス二〇〇〇」は、このような意図を持って企画され、二〇〇〇年七月二二日に実施されました。当日朝一〇時、抽選で選ばれた三〇〇人近い高校生などが、本郷キャンパスの法文二号館に集まりました。午前中は、塚本勝巳海洋研究所教授による「ウナギ・大回遊の謎」と吉川洋大学院経済学教授による「パブルの話・経済の話」という二つの講義が行われました。ほとんどの高校生にとっては、はじめて聞く大学の講義だったはずですが、彼らの感想は大変好意的でした。午後は、文系志望者、理系志望者に分かれ、文系志望者は法学部、理系志望者は農学部を見学した後、附属図書館、総合研究博物館、大講堂、ジムナジウムなど、

本郷キャンパスの中をグループ別に見学して歩きました。

すべての行事が終了したのは、午後六時。東京大学全学でこのような試みを行うのははじめてだったため、必ずしもすべてがスムーズに運んだわけではありません。しかし、アンケートを読む限りはほとんどの参加者が、この試みに満足し何らかの意義を見出していたようです。東京大学では、高校生の皆さんが受験の前に本学のことを少しでもよく知ることができるよう、今後も色々と工夫を重ねて、魅力あるオープンキャンパスを実施していきたいと考えています。

アンケートの回答から

講義について

はじめはウナギ? と思っていたが、とても面白かった。私は文科系志望だがわくわくした。とてもすばらしかった。医学部か理学部か進路を迷っていたけれど、やっぱり理学部にはいつか研究したいと思った。経済学なんて難しそうと思って敬遠していたんですが、意外と身近なことをやっているんだなと思いました。事実をただ教えるのではなく、今こういう研究をしているというふうな研究態度、方向性を示してもらえたのでとても面白かった。何よりも、先生方の研究に対する情熱や博識ぶりがよく分かり、ここで学びたいと強く思いました。

午後の見学について

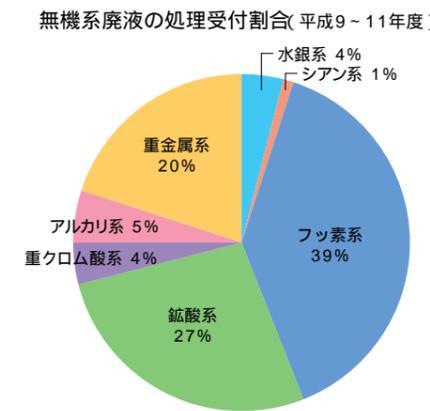
図書館にある本の数に驚いた。本が大好きなので、図書館に住みたくなった。博物館で、大学院生が分かりやすく、親身に説明してくれたので、とても面白かった。はじめに法学部長が「演習は楽しくて3時間でも4時間でも続きます。みんなやめたがらない」とおっしゃったので、私もぜひ参加したいと思い、ゾクゾクしました。いままで自分が思っていた農学部と実際の農学部が全く違うものだったので、農学部も面白そうだなと思った。広くてびっくりした。学生さんたちも落ち着いていてよい感じ。でも安田講堂の前で、草ぼうぼうですね。どの建物もずっしりとした伝統の重みを感じられ、キャンパスにあるたくさんのお木も力があふれている感じがしました。



望ましい環境創造のために

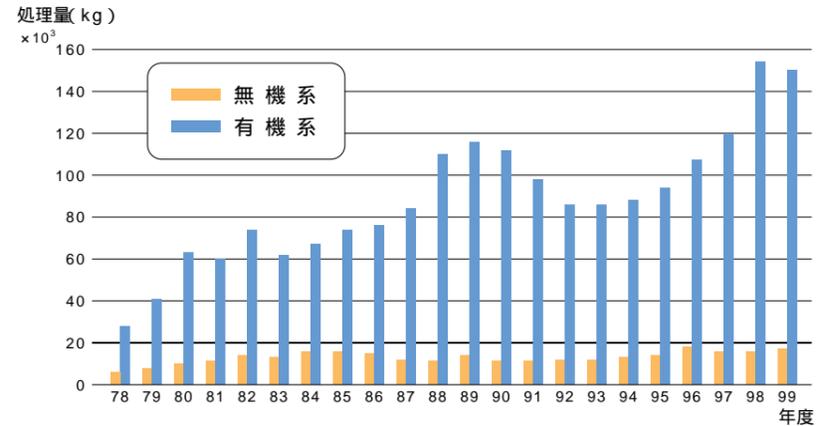
環境安全研究センターの取り組み

東京大学はおよそ七七〇〇名の教職員、一六〇〇〇名の学部学生、一二〇〇〇名の大学院生から成る社会的存在です。かつては東京都で水道の使用量ナンバーワンを誇っていました。もっとも、そのかなりの部分は三田池の水源になっていたとの噂もありましたが……。その後節水に努め、現在では、順位が下がっているかもしれませんが、しかし、一般ごみ排出量では、東京大学は東京ドームとやらで文京区内の両横綱だそうです。ところで、大学の使命は何でしょうか。一言で言えば、学問の自由の原則のもとに、新しい学問分野を切り開きつつ、人材育成のための教育を行うことでしょうか。当然、社会の中で、社会のために、社会とともに、その役割を果たすことが大切です。常に新しい事実を求め続けることは大学の大切な役割の一つです。実験科学の分野では、例えば、まったく知られていない物質を合成することに日夜励んでいる研究者が大勢います。もちろん人類の将来のために役立つ知識、現象、物質を求めて研究しているのです。しかし、その実験を進めるために様々な試薬を使います。したがって、実験に使った試薬類を実験終了後安全に処理しなければなりません。



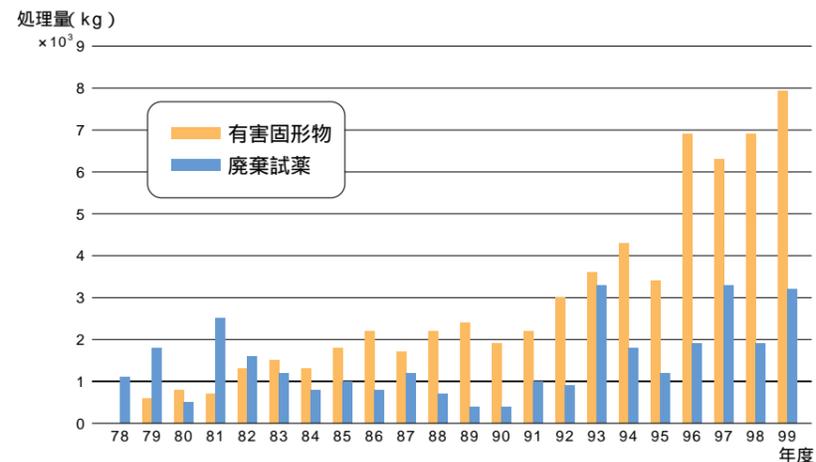
でも水銀、PCB、アスベスト等に関する対策が重要だっただと思います。また、実験廃棄物の増加と多様化(図参照)に対して、学内処理設備の充実を図ってきたことは特筆に値することです。一例として、燃焼炉よりダイオキシン類を排出しないように排ガス処理を高効率化しました。現在では、煙突そのものを必要としない新しい処理プロセスを開発しています。環境安全研究センターは、東京大学の環境の安全性を確保し、「学問の自由」を保障すると共に、社会的なリスクを可能なかぎり低減するために活動しているのです。

実験廃液の年度別処理受付量



臨界水による廃液処理プロセス「内分泌攪乱物質のバイオセンシング」環境管理・処理システムの高効率化」等の課題を研究し、地域に密着した環境研究を推進しています。

有害固形物と廃棄試薬の年度別処理受付量



環境監視のための下水道採水

産業界に開く

企業と大学の大規模共同研究

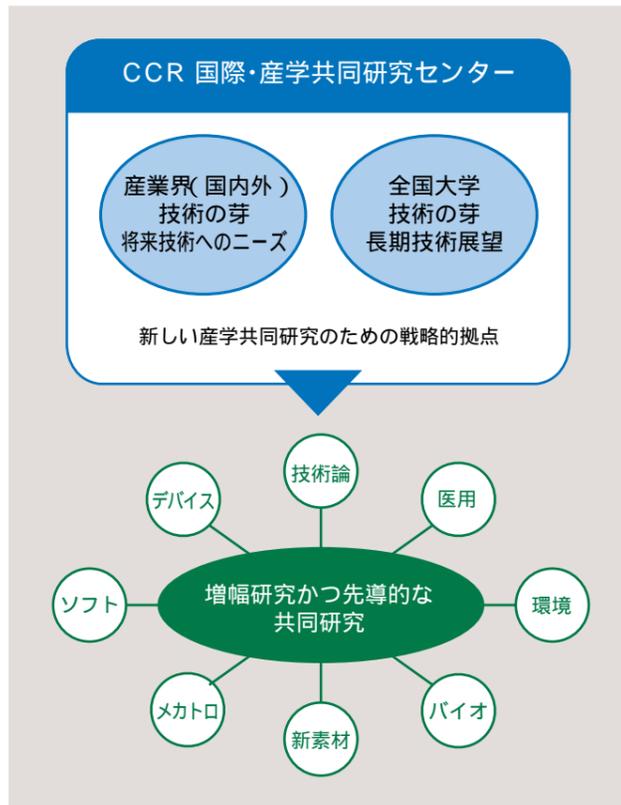
国際産学共同研究センターは、主に二つの活動を行っています。ひとつは、大学の技術と産業界のニーズをうまく連携させるリエゾン活動です。もう一つは、大学で開発された各種の技術を企業技術者との共同研究によって実用化(インキュベーション)することです。本センターには、八人の専任教授と一人の客員教授等がいます。バイオテクノロジーから情報、医療工学、メカトロニクス、材料等の広範囲な分野を専門とするスタッフが

研究に従事しています。産業界から見ると、大学で行われている研究や技術の内容は必ずしも簡単には理解できません。そこで、本センターでは産学連携のために本学教官の提案する共同研究等のデータのデータベースを作り、産業界にインターネット(<http://www.db.ccr.u-tokyo.ac.jp>)で公開しています。平成二二年一月一日付けで約二〇〇件の共同研究のテーマを公開したところ、一日に七〇〇〜八〇〇回のアクセス

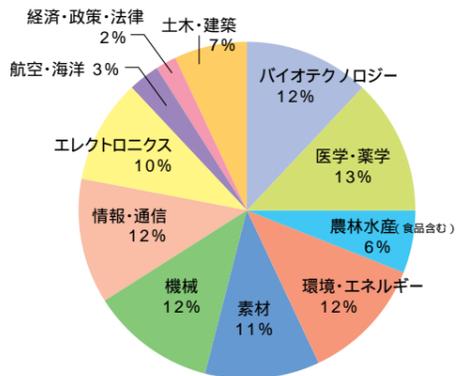
があり、最初の一週間で資料請求や共同研究の申し込みが三〇件以上ありました。その後も毎日のように問い合わせがあり、中には、具体的に共同研究を進めたいという申し込みもあります。産業界出身の客員教授と地方自治体出身のリサーチフェローにより、インタビュー方式で集めたデータを基にデータベースが作られております。現在、産業界からの要望に合わせて資料を提供したり、共同研究の具体的な条件についてリエゾン活動を行っています。

ンダストリー協会等が加わっています。代表者、児玉龍彦教授。これ以外にも、各教官が個別に多くの産学共同研究を進めています。今日、大学の社会への貢献が問われています。本センターの行っているデータベースの公開やリエゾン活動、大型産学共同研究が、その一助となればと考えています。

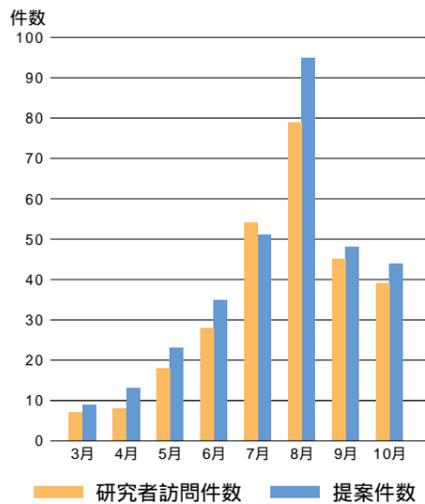
軽部征夫(かへいさお) 国際・産学共同研究センター長



提案テーマの 카테고리別提案状況

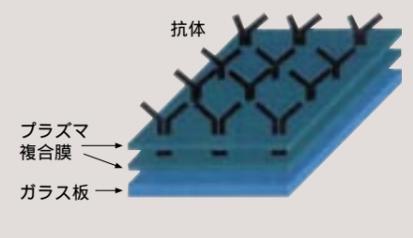


月別訪問・提案件数推移(平成12年)



抗体チップの概念図

多種類の抗体を固定化したチップで一度に多数のタンパク質を検出する





公開講座の歴史とテーマ

約五〇年にわたり開催され続けている
東京大学公開講座のあゆみ

大学での教育や研究の成果を、社会に対して発信する場のひとつが誰も
が参加することのできる公開講座です。東京大学の公開講座の歴史とそ
こで扱われたテーマの変遷をたどります。

大学は、一般に知られている以上に、社会
(世間)に開かれて来たし、現在も開かれてい
ます。いま風に表現すれば、近代日本の大学
はつねに「情報発信の拠点」でした。それは、
大学という固有の組織と、大学の行う知的営
為とから導き出される必然なのです。ここで
取り上げる東京大学の公開講座も、その一つ
の例です。
一般に公開講座とは、大学における教育研
究の成果を、大学人およびそれ以外の人々に

知らせる、普及させること
と考えてよいでしょう。時
代によって名称は異なりま
す。しかし、大学人がそれ
らの、いわば啓蒙活動に熱
心で積極的だったことは、
歴史に明らかです。では、
本学における公開講座の歴
史を振り返ってみましょう
(以下、特に断らない限り、
公開講座、普及講座につい
ては『東京大学百年史』資
料二に拠ります)。
一八八〇年代に、すでに
市民に向けての学術啓蒙活動
が展開されていきました。「理医学
講談会」は理学部および医学部の教授
が中心となって一八八四年五月に設置さ
れ、理医学諸科二開スル事項ヲ平易ニ講
談演説シテ公衆ヲシテ学術上ノ知識ヲ発達
セシムル」と謳っていました。以来、公開講
座には百二十数年の歴史が刻まれてきたので
す。

現在の公開講座の直接の淵源は、敗戦直後
にはじまった東京帝国大学普及講座にありま
す。第一回は法学部の大学普及講座、第二回
は経済学部の講座と推測されていますが、は
つきりするのには第三回からです。第三回は一
九四六年六月に開講され、一〇回行われまし
た。第四回からは公開講座と改称して、経済
学講座、文学講座、法学講座といったように、
統一テーマを掲げていました。一九四八年一
一月まで二六回の講座が開かれたことが分か
っています。この中に、現在の公開講座の
第一回が一九五三年にはじまるのです。
第一回の講座は、一月十七日から二月十四
日まで、法学部第一八番教室にて全一〇回開

催されました。ところで公開講座の主催を正
式に表現すると、財団法人東京大学総合研究
会となります。この総合研究会は、一九四六
年一月に「学術の理論及び応用の総合研究
を振作し、文化の向上、産業の開発、国民生
活の改善に資し、以て我が国の再建と世界文
明の発達に寄与する事」を目的に東京帝国大
学に置かれました。以来、同会が講座を主催
してきましたが、実際には総長をはじめとし
た、学部長会議のメンバーが運営の主体です。
講座の統一テーマ方式は、一九六二年の第
二一回「都市問題」から始まりました。テー
マ設定の方法は、毎回一人の学部長・研究科
長が輪番で企画委員長となり、各学部・研究
所から七、八人が出て、企画委員会をつくり、
そこでメイン・テーマを考え、講師を選定し、
総合研究会に諮り決定しています。東京大学
公開講座六七 東京大学 はしがき。

統一テーマ方式がはじまる第二一回以降の
テーマを一覧化してみました。講座の内容を
見ると、都市、情報、生活、生き方などに
かわるテーマが複数取り上げられています。
それらを読み比べてみるのも、一興でしょう。
一字のテーマも、家、酒、水、海、空、魚、
山、光、道、土と結構多くあります。大学の
周年に沿った企画もあります。一〇〇周年に
は「明治・大正の学者たち」(第四七回)、一
二五周年には題名もそのものの「東京大学」
(第六七回)です。社会の変化に対応したテー
マももちろん見られます。公害問題(第二八
回)、高齢化社会(第五〇回)、防災(第八四回)
などがそつです。
現在、公開講座は百花繚乱の状態にありま
す。いろいろな公開講座が開かれている中
にあって、あらためてその意味を振り返って
みることも、大事なような気がします。

公開講座統一テーマ 一覧(1962年 - 2000年)

1962年 第21回 都市	1983年 第59回 脳と心
第22回 技術革新の問題	第60回 情報化と社会
1963年 第23回 都市と生活	1984年 第61回 愛と人生
第24回 交通と生活	第62回 食べ物
1964年 第25回 生命	1985年 第63回 光
第26回 文学にあらわれた人間像	第64回 高度技術社会と人の生き方
1965年 第27回 宇宙	1986年 第65回 スポーツ
第28回 公害問題	第66回 バイオテクノロジーと社会
1966年 第29回 食糧	1987年 第67回 異文化への理解
第30回 言語	第68回 進化
1967年 第31回 人間と機械	1988年 第69回 道
第32回 家	第70回 ゆとり
1968年 第33回 日本の大学	1989年 第71回 気の世界
1970年 第34回 情報	第72回 土
1971年 第35回 人間と環境	1990年 第73回 環境
第36回 海	第74回 混沌
1972年 第37回 空	1991年 第75回 都市
第38回 親と子	第76回 生と死
1973年 第39回 男と女	1992年 第77回 ライフサイクル
第40回 エネルギー	第78回 性差と文化
1974年 第41回 アジアの中の日本	1993年 第79回 地球
第42回 天災と人災	第80回 アメリカと日本
1975年 第43回 酒	1994年 第81回 結婚
第44回 水	第82回 コメ
1976年 第45回 地震	1995年 第83回 くすり
第46回 健康と生活	第84回 防災
1977年 第47回 明治・大正の学者たち	1996年 第85回 文化としての20世紀
第48回 魚	第86回 現代幸福論
1978年 第49回 流	- 豊かな人生を送るために -
第50回 高齢化社会	1997年 第87回 家族
1979年 第51回 生命	第88回 東京大学
第52回 子ども	1998年 第89回 車(くるま)
1980年 第53回 山	第90回 ゲーム
第54回 文明と人間	1999年 第91回 こよみ
1981年 第55回 ミクロの世界	第92回 夢
第56回 消費者	2000年 第93回 相性(あいしょう)
1982年 第57回 世界と日本	第94回 分ける
第58回 ことば	

